

森林レンジャーがゆく

森の若返り

(86)



菅生地区でボランティアと市が協力して次世代につなぐ森づくりに取り組んでいます。ここでは、里山と呼ばれるコナラ林ですが、薪炭利用が無くなりコナラは老木となり、森そのものが高齢化しているため、森の若返りが大きな課題です。このままコナラ林を残そうとしても、コナラの下にはヒサカキやアラカシなどの常緑照葉樹が控えています。コナラの寿命が尽きると照葉樹が育ちはじめ、知らぬ間に暗い森になってしまう。自然に任せて森の形が変わるのが自然という考え方もありますが、この老齢のコナラ林を若く明るい森にすることも大切だと考えています。

作業は、まず林内にある藪やぶ（ヒサカキやアラカシなどの幼木）を手作業で刈払うことから始めます。そして、森の天井（樹冠閉鎖した状態）に穴を開けるように高木の伐採をして、ドングリから芽生えたコナラが育っていくスペースを作りながら森を維持していきます。コナラ林は野生動物も利用しているため、森の機能を維持できるように、残す木と切る木の選木を慎重に行います。時には残す木の狭い間に伐倒することもあります。それは針の穴を通すよう



な伐倒になり、経験を積んだボランティアのチャレンジになります。とはいえ、ボランティア主導の整備です。ケガなく安全に作業することが一番なので、かかり木になってチルホールで引いたり回したりして木1本を安全に処理するのに半日を費やすことも度々あります。

森づくりは長い目でみることもとても重要です。作業効率に重きを置くと大きな事故の要因になることもあります。ボランティアの方が作業を楽しみつつ安全な森づくりがこの先も続いていくことを望んでいます。（杉野）